

Title	東京歯科大学千葉・水道橋両病院における唇顎口蓋裂および顎変形症患者数の15年間の動向
Author(s)	坂本, 輝雄; 原崎, 守弘; 一色, 泰成
Journal	歯科学報, 99(7): 591-602
URL	http://hdl.handle.net/10130/1196
Right	

東京歯科大学千葉・水道橋両病院における唇顎口蓋裂および 顎変形症患者数の15年間の動向

坂本輝雄 原崎守弘 一色泰成

東京歯科大学歯科矯正学講座

(主任：一色泰成 教授)

(1999年2月26日受付)

(1999年4月13日受理)

抄録：1983年1月から1997年12月までの15年間に東京歯科大学千葉病院および水道橋病院矯正歯科に来院した唇顎口蓋裂および顎変形症患者数について調査した。

千葉病院における唇顎口蓋裂受診患者の総数は471人で、年平均31.4人、治療患者率は94.0%であった。顎変形症患者の総数は840人、年平均56.0人、治療患者率は90.5%であった。水道橋病院における唇顎口蓋裂患者の総数は568人、年平均37.9人、治療患者率は84.6%であった。顎変形症患者の総数は463人、年平均30.9人、治療患者率は84.5%であった。唇顎口蓋裂患者数は毎年ほぼ一定しているが、顎変形症患者数は健康保険が導入された年(千葉病病院は1990年、水道橋病院は1996年)以降その数が急増し、1997年には保険適用患者の総患者数に占める割合が、千葉病院では37.5%、水道橋病院では40.2%となった。

キーワード：患者動向、唇顎口蓋裂、顎変形症

緒 言

口唇口蓋裂患者の歯科矯正治療に対して、昭和57年(1982年)4月より健康保険制度が導入され、5月より更生(育成)医療の適用を受け患者の経済的負担が軽減した。また、平成2年(1990年)7月より顎変形症患者の手術前後における矯正治療が健康保険の適用を受け、歯科大学附属病院が保険治療施設認定され(本学においては千葉病院が1990年より、水道橋病院は1996年以降)、施設認定の枠が1996年から更生(育成)医療の承認機関にまで広げられた。このように矯正治療は従来一般治療で保険治療の適応が全くなかったのに対し、著し

い咬合異常で外科手術が必要な矯正治療に対しても保険が適用されて、矯正歯科をとりまく環境は大きく変わった。また、このことは歯科病院の立地的環境や歯科医師の疾病に対する対処の仕方によって、患者の動態を大きく変動することが考えられ、来院患者の動向を調査し現状を把握することは、今後の患者への対応や医療福祉に対する対応を考える上で参考になると思われる。そこで、都心型の水道橋病院と地域型の千葉病院における唇顎口蓋裂および顎変形症患者の最近15年間の来院状況を調査し、健康保険導入による時期をはさんで検討したのでその結果を報告する。

調査対象および調査項目

1983年1月から1997年12月までの15年間に東京

表1 全新来患者数および治療患者数

年次	千葉病院			水道橋病院		
	新来患者	治療患者	治療患者率(%)	新来患者	治療患者	治療患者率(%)
1983	748	376	50.3	458	122	26.6
1984	799	421	52.7	412	131	31.8
1985	794	367	46.2	387	113	29.2
1986	920	468	50.9	464	158	34.1
1987	879	408	46.4	407	189	46.4
1988	814	426	52.3	385	174	45.2
1989	875	397	45.4	467	179	38.3
1990	751	358	47.7	471	168	35.7
1991	889	374	42.1	600	199	33.2
1992	878	367	41.8	562	239	42.5
1993	854	373	43.7	498	208	41.8
1994	882	396	44.9	468	252	53.8
1995	831	390	46.9	484	271	56.0
1996	843	411	48.8	593	321	54.1
1997	816	376	46.1	509	311	61.1
計	12,573	5,908	47.0	7,165	3,035	42.4

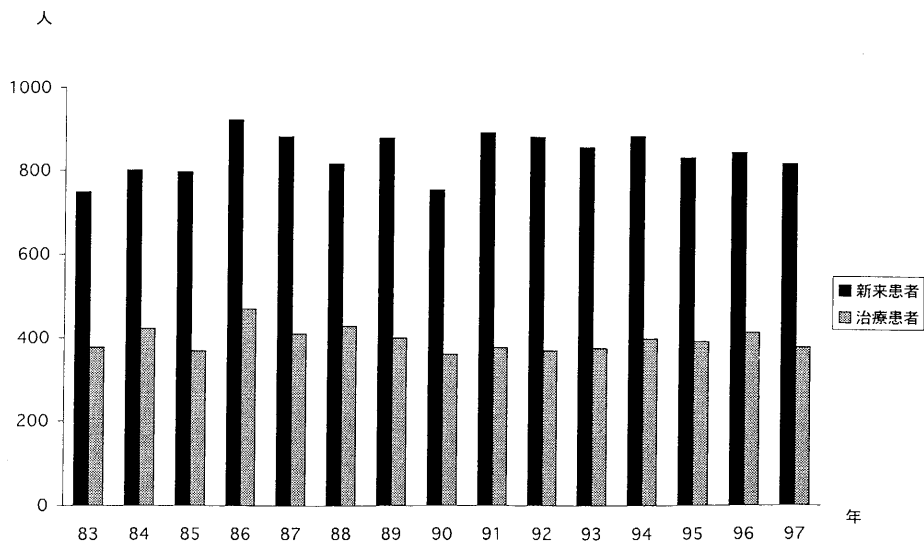


図1 全新来患者数および治療患者数(千葉病院)

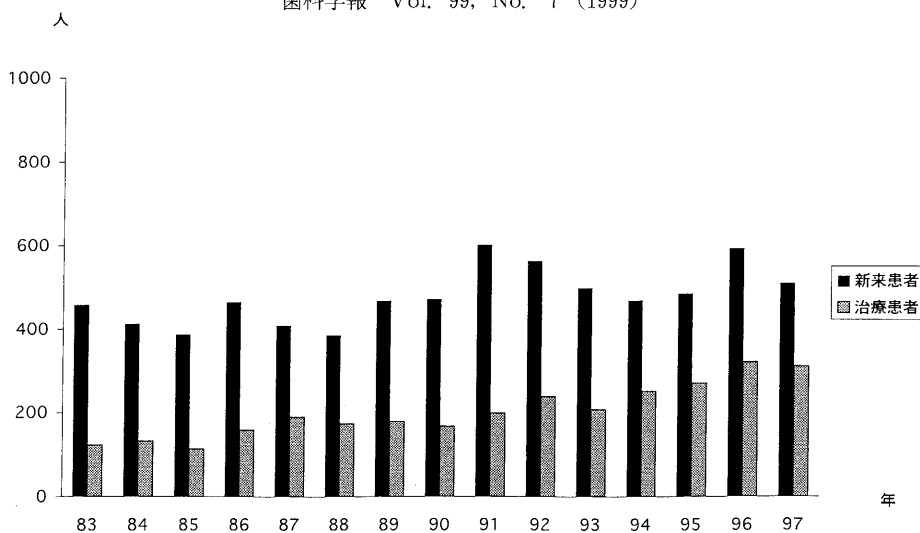


図2 全新生患者数および治療患者数 (水道橋病院)

歯科大学千葉病院および水道橋病院矯正歯科に来院した患者に関して、以下の項目について調査した。

1. 矯正歯科全体の初診患者(以下、新来患者)数および実際に治療を開始した患者(以下、治療患者)数
2. 唇顎口蓋裂および顎変形症患者の新来患者数
3. 唇顎口蓋裂および顎変形症患者の治療患者数

結 果

1. 全新生患者数および全治療患者数(表1, 図1, 図2)

千葉病院矯正歯科に来院した15年間の新来患者数は総計12,573人、1年あたりの平均は838.2人(最小748人, 最大920人)であった。また治療患者数は総計5,908人、1年あたりの平均は393.9人(最小358人, 最大468人)で、新来患者数, 治療患者数とも毎年ほぼ一定していた。15年間にわたる治療患者率は47.0%であったが、年次による差は小さく、41%~53%の範囲を変動していた。

水道橋病院矯正歯科に来院した新来患者数は総計7,165人、1年あたりの平均は477.7人(最小385人, 最大600人)であった。また治療患者数は総計3,035人、1年あたりの平均は202.3人(最小113人, 最大321人)、治療患者率は42.4%であったが年次による差が大きく26%~61%のひらきがあっ

た。しかし水道橋病院においては、治療患者数, 治療患者率とも年々増加傾向にあった。

2. 唇顎口蓋裂および顎変形症患者の新来患者数

1) 千葉病院(表2)
唇顎口蓋裂患者の15年間の新来患者の総数は501人、年平均33.4人であった。全新生患者に占める割合は毎年2~7%の間にあり、1987年以降はゆるやかな増加傾向を示していた。また、男女の比率は年ごとに変動はあるものの、全体では男244人, 女257人とほぼ1:1であった。

顎変形症患者の新来患者の総数は928人、年平均61.9人であった。全新生患者に対する割合は、1990年までは大体5%前後であったが、1991年を境に増加し、1994年には10%を越え、なお増加傾向にあった。また男女の比率は、男341人に対し女587人で約1:1.7であった。

- 2) 水道橋病院(表3)

唇顎口蓋裂患者の15年間の新来患者の総数は671人、年平均44.7人であった。また全新生患者に占める割合は、15年間を通じての変動は大きかったが、1992年以降は10%前後に落ちついてきているようである。また、男女の比率は、男342人に対し女329人でほぼ1:1であった。

顎変形症患者の新来患者の総数は548人、平均36.5人であった。全新生患者に対する割合は、年

表2 唇顎口蓋裂および顎変形症の新来患者数(千葉病院)

年次	全新来患者	唇顎口蓋裂				顎変形症			
		男	女	計	%	男	女	計	%
1983	748	10	21	31	4.1	7	26	33	4.4
1984	799	18	10	28	3.5	5	9	14	1.8
1985	794	11	13	24	3.0	14	17	31	3.9
1986	920	10	11	21	2.3	10	36	46	5.0
1987	879	16	3	19	2.2	14	33	47	5.3
1988	814	14	8	22	2.7	28	24	52	6.4
1989	875	14	15	29	3.3	11	23	34	3.9
1990	751	10	12	22	2.9	13	19	32	4.3
1991	889	20	19	39	4.4	27	38	65	7.3
1992	878	14	20	34	3.9	27	49	76	8.7
1993	854	27	21	48	5.6	30	50	80	9.4
1994	882	18	22	40	4.5	38	71	109	12.4
1995	831	17	23	40	4.8	30	64	94	11.3
1996	843	23	26	49	5.8	39	64	103	12.2
1997	816	22	33	55	6.7	48	64	112	13.7
計	12,573	244	257	501	3.98	341	587	928	7.38

次によって増減の変動があるものの全体的には増加傾向を示しており、1994年には10%を越え、以後さらに増加する傾向にあった。また男女の比率は、男188人に対し、女360人で約1:2であった。

3. 唇顎口蓋裂および顎変形症患者の治療患者数および治療患者率(表4)

1) 千葉病院(図3, 図5)

唇顎口蓋裂患者の15年間の治療患者の総数は471人、年平均31.4人であり、全治療患者に占める割合は8.0%であった。15年間にわたる治療患者率は94.0%で非常に高率を示していた。

顎変形症患者の治療患者の総数は840人で、全治療患者に占める割合は14.2%であった。1990年までは年次による変動はあるものの50人を越えることはなかったが、1991年以降急増し年々増加の傾向にあり、100人前後になろうとしている。治療患者率は一部の例外を除き毎年80~97%と高率

であった。

2) 水道橋病院(図4, 図6)

唇顎口蓋裂患者の15年間の治療患者の総数は568人、1年平均37.9人であり、全治療患者に占める割合は18.7%であった。15年間にわたる治療患者率は84.6%であった。

顎変形症患者の治療患者の総数は463人で、全治療患者に占める割合は15.3%であった。年次により治療患者数に増減はあるものの全体的には増加の傾向にあり、1989年以降は25~30人、1994年には40人を越え、さらに健康保険が導入された1996年には80人を越えた。また、15年間にわたる治療患者率は84.5%であった。

考 察

1. 口唇口蓋裂および顎変形症患者の歯科矯正治療に対する保険導入について

表3 唇顎口蓋裂および顎変形症の新来患者数(水道橋病院)

年次	全 新 来 患 者	唇顎口蓋裂				顎変形症			
		男	女	計	%	男	女	計	%
1983	458	29	29	58	12.7	1	6	7	1.5
1984	412	28	29	57	13.8	6	5	11	2.7
1985	387	22	17	39	10.1	5	9	14	3.6
1986	464	15	17	32	6.9	9	21	30	6.5
1987	407	23	25	48	11.8	3	6	9	2.2
1988	385	28	17	45	11.7	9	14	23	6.0
1989	467	21	17	38	8.1	12	22	34	7.3
1990	471	21	11	32	6.8	13	31	44	9.3
1991	600	14	12	26	4.3	16	17	33	5.5
1992	562	27	24	51	9.1	9	18	27	4.8
1993	498	24	31	55	11.0	10	25	35	7.0
1994	468	26	22	48	10.3	17	31	48	10.3
1995	484	20	27	47	9.7	17	36	53	11.0
1996	593	22	27	49	8.3	33	55	88	14.8
1997	509	22	24	46	9.0	28	64	92	18.1
計	7,165	342	329	671	9.36	188	360	548	7.65

口唇裂口蓋裂は口腔領域において最も発現頻度の高い先天異常であり、それらに対する形成手術の影響により、発音および咀嚼機能障害を伴う著しい咬合異常が発現する症例が存在する。また、これらの症例に対する矯正歯科治療は困難を伴い、かつ長期にわたることが多い。そのため唇顎口蓋裂患者の歯科矯正治療に対して、昭和57年(1982年)4月より健康保険制度が導入された。それに伴い児童福祉法第20条に基づき育成医療が適用となり、患者の経済的負担が大幅に軽減した。

一方、平成2年(1990年)7月より顎変形症患者の手術前後における矯正治療が、厚生大臣が定める施設基準に適合している保険医療機関(本学においては千葉病院が1990年、水道橋病院は1996年以降)で健康保険が承認された。また顎変形症の歯科矯正治療を保険で対応できる認定施設は、当初は歯科大学附属病院に限られていたが、1996年

4月より更生(育成)指定医療機関にまでその認定枠が拡大された。これら顎外科手術を伴う矯正治療が保険に導入された背景は、骨格的不調和を伴う著しい咬合異常や咀嚼機能障害は勿論のこと、醜貌など精神心理学的な要因を含めて改善治療することが考えられて導入されたものと言える。また、保険導入によって顎変形症は疾病であると社会的に認知されたことになり、治療費も手術は保険、矯正治療は自費といった矛盾も解決され、治療の整合性が得られた。

2. 全新生患者および治療患者数について

千葉病院における新生患者は、毎年約800人、治療患者数はおよそ400人とほぼ一定している。これは千葉病院では来院患者の92.7%が千葉市または千葉県下からの患者である¹⁾ためと思われる。一方、水道橋病院における新生患者は、毎年約500人、治療患者数はおよそ200人と、千葉病院

表4 唇顎口蓋裂および顎変形症の治療患者と治療患者率

年次	唇顎口蓋裂				顎変形症			
	千葉病院		水道橋病院		千葉病院		水道橋病院	
	治療患者	治療患者率(%)	治療患者	治療患者率(%)	治療患者	治療患者率(%)	治療患者	治療患者率(%)
1983	31	100.0	52	89.7	28	84.8	6	85.7
1984	24	85.7	45	78.9	8	57.1	8	72.7
1985	22	91.7	34	87.2	28	90.3	12	85.7
1986	19	90.5	28	87.5	39	84.8	26	86.7
1987	19	100.0	38	79.2	44	93.6	5	55.6
1988	21	95.5	37	82.2	48	92.3	13	56.5
1989	28	96.6	33	86.8	32	94.2	28	82.4
1990	20	90.9	25	78.1	29	90.6	34	77.3
1991	39	100.0	22	84.6	60	92.3	26	78.8
1992	34	100.0	45	88.2	74	97.4	25	92.6
1993	38	79.2	46	83.6	78	97.5	29	82.9
1994	40	77.5	38	79.2	103	94.5	42	87.5
1995	40	85.0	37	78.4	84	89.4	45	84.9
1996	45	91.8	46	93.9	95	92.2	81	92.4
1997	51	92.7	42	91.3	90	80.4	83	90.2
計	471	94.0	568	84.6	840	90.5	463	84.5

の約半数であるが、年々増加傾向にある。この要因として、本学が1981年9月に水道橋から千葉に移転し、それに伴い医局員の大半が千葉病院に所属したことによるが、その後診療援助医等、人員の増加によって矯正治療患者が増加しているものと思われる。また治療患者率は、千葉病院では約47.0%、水道橋病院では42.4%とほぼ同様であったが、初診患者のうち実際に治療を受ける患者は半数以下と認識するのが妥当であると思われる。

3. 唇顎口蓋裂と顎変形症患者の新来患者数および男女差

唇顎口蓋裂患者において、千葉病院では毎年全新来患者の4%前後にほぼ安定しているが、水道橋病院では10%前後と千葉病院に比べ唇顎口蓋裂患者が多い。千葉病院では本学口腔外科からの紹介が大半を占めるのに対し、水道橋病院では医学

部附属病院の形成外科から患者が紹介されることが多いためと思われる。顎変形症患者においては、千葉病院では手術前後の矯正治療が健康保険に導入された1991年には倍増し年々増加傾向にある。水道橋病院では、保険適用まではゆるやかな増加傾向にあったが、やはり1996年の保険導入後は急増した。このことは大阪大学²⁾や大阪歯科大学病院³⁾でも同様で健康保険導入後急増したが、大都市という立地条件が似ているためと考えられる。一方男女差については、唇顎口蓋裂患者では、千葉病院および水道橋病院ともにほぼ1:1で、従来の報告^{4)~11)}と同様であった。一般患者において審美的要求の高い女子の方が多いが、唇顎口蓋裂患者では、咀嚼および発音機能障害、審美的、心理的改善の要求には性差がないことと、唇顎口蓋裂の出生率での男女比は55:45と男の方が

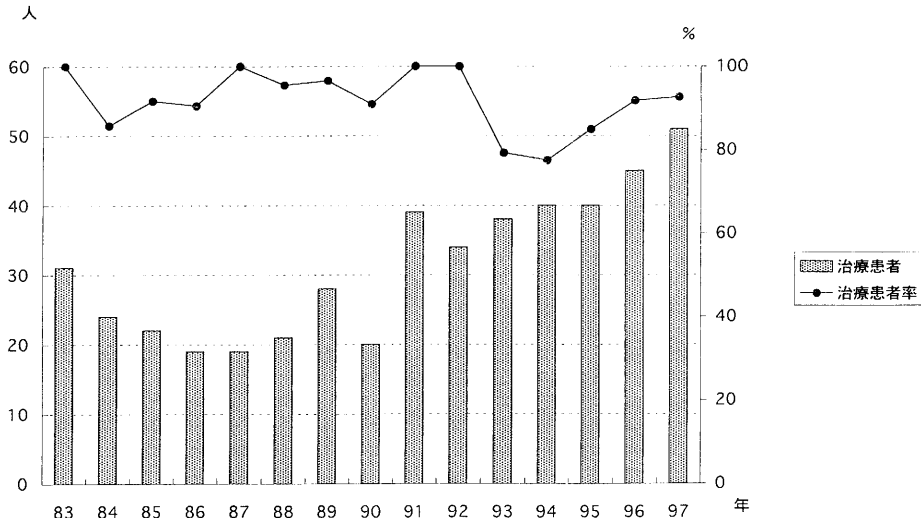


図3 唇顎口蓋裂患者の治療患者数および治療患者率（千葉病院）

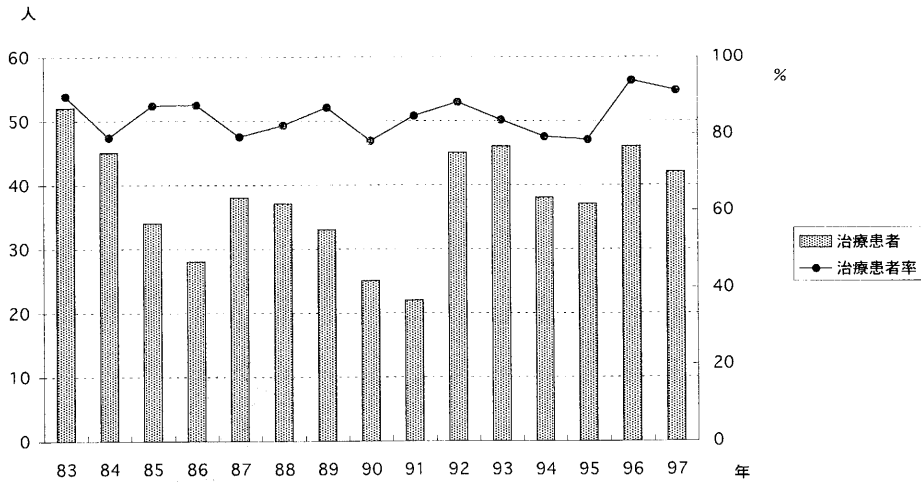


図4 唇顎口蓋裂患者の治療患者数および治療患者率（水道橋病院）

多い¹²⁾ことによるものと思われる。顎変形症患者の男女比は、千葉病院では1:1.7、水道橋病院では1:1.9と女子の方が約2倍で、大阪大²⁾、新潟大¹³⁾、朝日大¹⁴⁾の報告と同様で、女子の方がより審美的要求が高いものと思われる。これは、一般の矯正治療に対する男女比とほぼ同じ、すなわち永井ら¹⁾の報告では男性約36%、女性64%、女性の比率では伊東ら:62.9%¹⁵⁾、須佐美ら:

65.2%¹⁶⁾、有吉ら:63.3%¹⁷⁾、岸本ら:66%¹⁸⁾とほぼ同じで、これらから矯正治療において一般矯正治療患者および顎変形症患者の男女比では日本全国地域差がないものと思われる。

4. 唇顎口蓋裂と顎変形症患者の治療患者数および治療患者率

唇顎口蓋裂の治療患者数は、千葉病院では毎年約30人、水道橋病院では約40人とほぼ一定してお

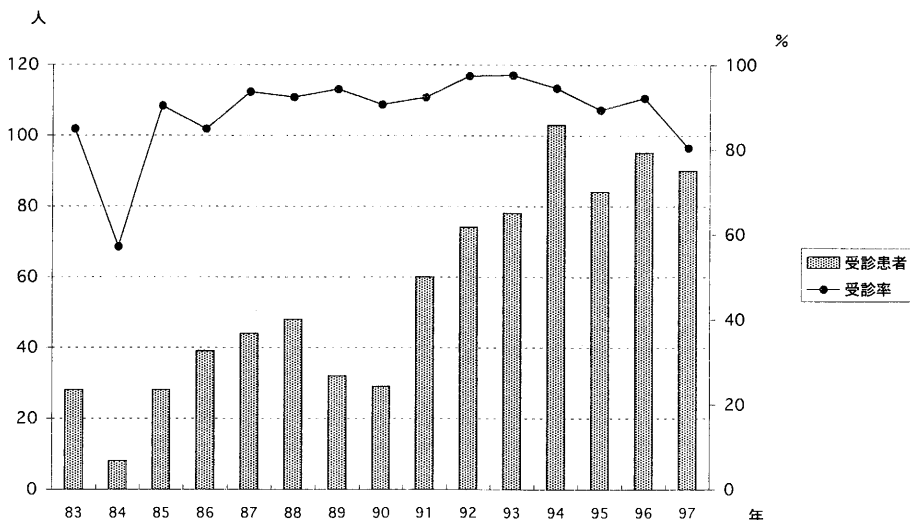


図5 顎変形症患者の治療患者数および治療患者率 (千葉病院)

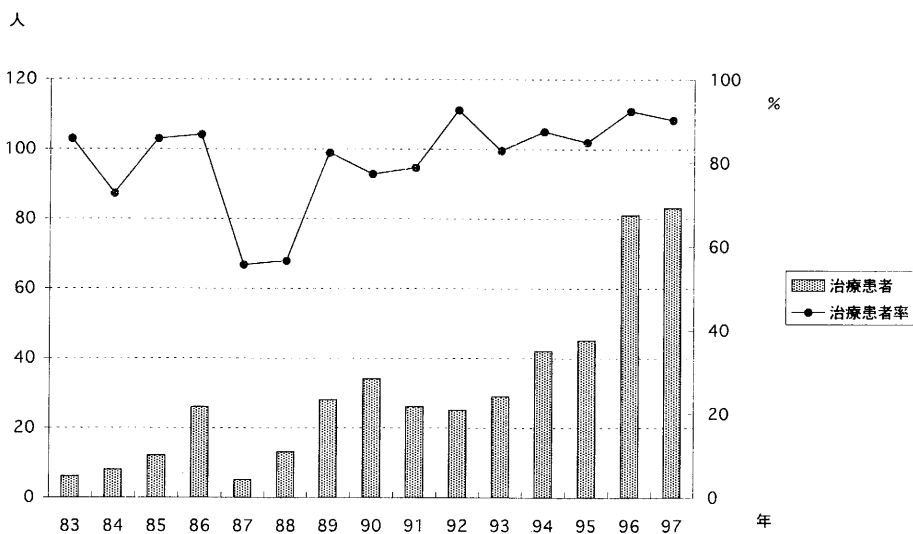


図6 顎変形症患者の治療患者数および治療患者率 (水道橋病院)

り、総患者数に占める割合は千葉病院が8.0% (5,908人中471人)、水道橋病院が18.7% (3,035人中568人)であった。他施設の報告では、大阪歯科大学: 8.9%⁹⁾、広島大学: 10.7%⁸⁾、九州大学: 10.9%⁵⁾、大阪大学: 20.9%¹¹⁾、川崎医科大学: 22.6%⁴⁾、金沢医科大学: 23.2%⁸⁾と様々であるが、病院の立地条件や病院を取りまく環境の違いによるものと思われる。また、治療患者率も両病

院とも90%前後と安定して高い治療患者率であるが、唇顎口蓋裂患者のほとんどは、チームアプローチを行っている口腔外科や形成外科からの紹介で、紹介先で矯正治療の必要性について充分説明を受け矯正治療について理解および納得していること、1982年より健康保険および更生(育成)医療が導入されているためと思われる。

一方顎変形症患者の治療患者数は健康保険が導

表5 保険適用治療患者（唇顎口蓋裂および顎変形症）の占める比率

年次	千葉病院			水道橋病院		
	全治療患者	保険患者	%	全治療患者	保険患者	%
1983	376	59	15.7	122	58	47.5
1984	421	32	7.6	131	53	40.5
1985	367	50	13.6	113	46	40.7
1986	468	58	12.4	158	54	34.2
1987	408	63	15.4	189	43	22.8
1988	426	69	16.2	174	50	28.7
1989	397	60	15.1	179	61	34.1
1990	358	49	13.7	168	59	35.1
1991	374	99	26.5	199	48	24.1
1992	367	108	29.4	239	70	29.3
1993	373	116	31.1	208	75	36.1
1994	396	143	36.1	252	80	31.7
1995	390	124	31.8	271	82	30.3
1996	411	140	34.1	321	127	39.6
1997	376	141	37.5	311	125	40.2
計	5,908	1,311	22.2	3,035	1,031	34.0

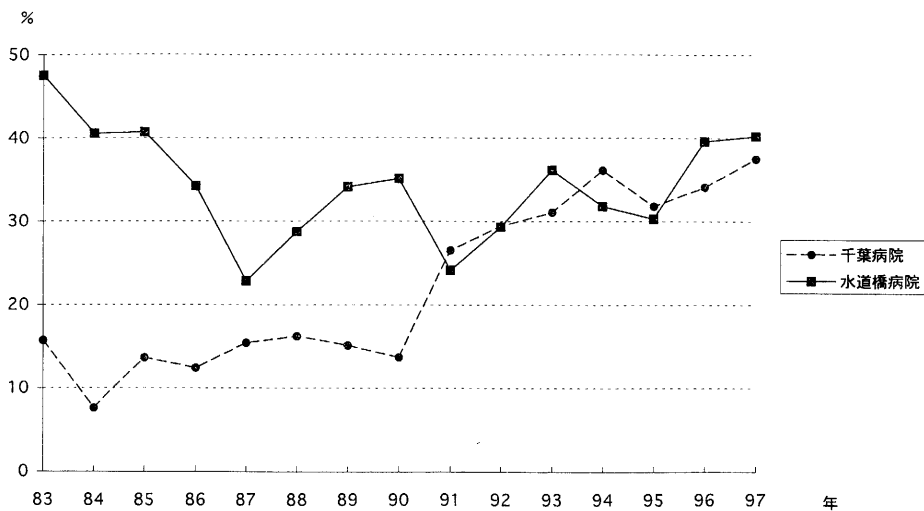


図7 保険患者の比率

入された年,すなわち千葉病院では1990年,水道橋病院では1996年を境に急増している。治療患者率は,一般患者の治療患者率(40%前後)とは異なり,健康保険導入にかかわらず高い。このことは,顎変形症患者は当然成人患者が多く,来院動機も自ら望んで来院し,より治療に対する要求が高いものと思われる。よって顎離断手術前後の矯正治療に健康保険が導入されたことは,顎変形症患者にとって経済的に多大なる利益となっていると考えられる。

5. 唇顎口蓋裂および顎変形症治療患者の全治療患者に対する割合

千葉病院における保険適用患者,すなわち唇顎口蓋裂および顎変形症患者の全治療患者に対する割合は,東京都から千葉市への移転後は紹介病院が少ないこともあり10数%前後であったが,顎変形症の手術前後の矯正治療に保険が導入された1990年の翌年からその比率は倍増し,1993年には30%を越え,現在では約1/3が保険患者である。一方水道橋病院は,大学移転後減少傾向にあったが,保険指定医療機関となった1996年から約40%が保険患者である(表5,図7)。こうした保険適用患者への対応は大学病院の使命上,止むを得ないが,研究,学生教育および矯正専門医の育成という大学病院の役割を考えると,幅広い症例が望ましい。その観点から著者らは,顎変形症患者に対する保険医療機関の認定枠の拡大を提言してきた¹⁹⁾²⁰⁾。1996年より更生(育成)医療機関にまで認定枠が広がったが,これは我々の提言が一部反映されたものと考えられる。今後,今まで大学病院に集中していた顎変形症患者が一般医に分散することが予想され,治療の受けやすさということでは患者にもたらす恩恵は大きいと思われる。

結 論

1983年1月から1997年12月までの15年間に東京歯科大学千葉病院および水道橋病院矯正歯科に来院した総患者数,唇顎口蓋裂および顎変形症患者数について調査した。

1. 全新来患者数および全治療患者数

千葉病院に来院した新来患者数は総計12,573人,年平均838.2人であった。また治療患者数は総計5,908人,年平均は393.9人,15年間にわたる治療患者率は47.0%であった。

水道橋病院では新来患者数は総計7,165人,年平均は477.7人であった。治療患者数は総計3,035人,年平均は202.3人,15年間にわたる治療患者率は42.4%であった。

2. 唇顎口蓋裂および顎変形症患者の新来患者数

千葉病院における唇顎口蓋裂患者の総数は501人,年平均33.4人であった。男女の比率はほぼ1:1であった。顎変形症患者の総数は928人,年平均61.9人であった。男女の比率は,約1:1.7であった。

水道橋病院における唇顎口蓋裂患者の総数は671人,年平均44.7人であった。男女の比率はほぼ1:1であった。顎変形症患者の総数は548人,年平均36.5人であった。男女の比率は約1:2であった。

3. 唇顎口蓋裂および顎変形症患者の治療患者数および治療患者率

千葉病院における唇顎口蓋裂患者の総数は471人,年平均31.4人であり,全治療患者数に占める割合は8.0%であった。また治療患者率は94.0%であった。顎変形症患者の総数は840人,年平均56.0人,全治療患者数に占める割合は14.2%であった。また治療患者率は90.5%であった。

水道橋病院における唇顎口蓋裂患者の総数は568人,年平均37.9人,全治療患者数に占める割合は18.7%であった。また治療患者率は84.6%であった。顎変形症患者の総数は463人,年平均30.9人,全治療患者数に占める割合は15.3%であった。また治療患者率は84.5%であった。

健康保険の対象となる唇顎口蓋裂患者数はほぼ一定しているが,顎変形症患者数は健康保険が導入された年(千葉病院は1990年,水道橋病院は1996年)以降その数が急増し,そのため1997年には保険適用患者の総患者数に占める割合が,千葉病院では37.5%,水道橋病院では40.2%となった。

本論文の要旨は、第18回日本口蓋裂学会総会(1994年6月30日・7月1日、大阪市)において発表した。

参 考 文 献

- 1) 永井宏人, 平野義雄, 原崎守弘, 一色泰成, 瀬端正之: 千葉および水道橋病院における新来矯正患者の動向について. 歯科学報, 90: 71~82, 1990.
- 2) 岩崎万喜子, 山本照子, 永田裕保, 山城 隆, 三間雄司, 高田健治, 作田 守: 過去12年間に大阪大学歯学部附属病院矯正科で治療を開始した成人患者の受診状況. 日矯歯会誌, 53: 696~703, 1994.
- 3) 高橋一郎, 橋本 登, 平木良隆, 日野諄修, 白数力也, 中嶋正博, 岡野博郎, 川添亮彬: 大阪歯科大学付属病院における顎変形症患者の臨床統計的観察. 日顎変形会誌, 5: 184~189, 1995.
- 4) 佐藤康守, 林 幸則, 中川皓文, 瀬上夏樹, 小岩純久, 福田道男: 川崎医科大学附属病院矯正歯科における口蓋裂患者の臨床統計的観察—矯正歯科開設にいたるまでの約9年間について—. 日口蓋裂会誌, 11: 238~248, 1986.
- 5) 河野紀美子, 鈴木 陽, 渡辺美恵子, 近藤由紀子, 向井 陽, 大津孝法, 高濱靖英: 口唇裂口蓋裂患者の矯正受診と咬合の実体—九州大学歯学部附属病院矯正科における19年間の統計—. 日口蓋裂会誌, 14: 159~170, 1989.
- 6) 坪倉志乃, 井藤一江, 岩谷有子, 小澤 泰, 横山智世子, 木村浩司, 切通正智, 山内和夫: 広島大学歯学部附属病院矯正歯科における口唇口蓋裂患者の統計的観察—開設以来21年間について—. 日口蓋裂会誌, 15: 132~143, 1990.
- 7) 鬼久保 平, 高橋政人, 吉川正芳, 高 大松, 会田泰明, 岩本矢栄子, 林 治君, 中村元興, 清村 寛: 明海大学病院矯正歯科における口唇裂口蓋裂患者の実体調査—歯と咬合の異常について—. 日口蓋裂会誌, 17: 356~365, 1992.
- 8) 中川 真, 香林正治, 出村 昇, 勝田 誠, 須佐美隆三: 金沢医科大学病院矯正歯科における口唇裂口蓋裂患者の統計的観察—開設以来15年間について—. 日口蓋裂会誌, 18: 300~309, 1993.
- 9) 山田尋士, 大矢卓志, 富井恭子, 松本尚之, 川本達雄, 木下善之介: 口唇裂口蓋裂を有する矯正患者に関する10年間の統計的観察. 日口蓋裂会誌, 19: 42~52, 1994.
- 10) 富永礼司, 伊藤大輔, 天野浩美, 山本 真, 岩田耕治, 宇治正光, 馬場詳行, 須佐美隆史, 本橋信義, 大山紀美栄, 黒田敬之: 当科に来院した口唇裂口蓋裂患者の臨床統計的調査. 日口蓋裂会誌, 19: 164~176, 1994.
- 11) 反橋由佳, 山本照子, 中川浩一, 社 浩太郎, 高田健治, 作田 守: 口唇口蓋裂を伴う患者の統計的観察—大阪大学歯学部附属病院矯正科における最近15年間について—. 日口蓋裂会誌, 19: 257~264, 1994.
- 12) 宮崎 正: 口唇口蓋裂の分類と統計, 口蓋裂 その基礎と臨床 第1版, 宮崎 正編, 40~57, 医歯薬出版, 東京, 1982.
- 13) 武藤祐一, 大橋 靖, 鍛冶昌孝, 内山奈津子, 福田純一, 服部幸男, 島貫久美子, 河田 匠, 高木律男, 花田晃治: 最近10年間に施行した顎矯正手術223名(231例)の臨床統計的検討. 日顎変形会誌, 6: 115~121, 1996.
- 14) 遠藤 誠, 新屋敷 健, 荒木元秀, 岸本正雄, 太田安彦, 小野晋祐, 丹羽金一郎: 朝日大学付属病院矯正歯科における顎変形症患者の臨床統計的観察. 近畿東海矯正歯会誌, 31: 22~27, 1996.
- 15) 伊東美紀, 板井哲夫, 川本壽夫, 渡辺八十夫, 山内和夫: 過去12年間に広島大学歯学部附属病院に来院した矯正患者の統計的観察. 日矯歯会誌, 39: 427~435, 1980.
- 16) 須佐美隆三, 浅井保彦, 広瀬浩三, 細井達郎, 林 勲, 滝本貞蔵: 不正咬合の発現に関する疫学的研究, 1. 不正咬合発現頻度—概要—, 日矯歯会誌, 30: 221~229, 1971.
- 17) 有吉正一, 福泉喜久夫, 津田武明, 福泉靖彦, 飯田隆也: われわれの教室に於ける最近8ヶ年間の矯正患者統計的観察. 西日本矯正歯会誌, 12: 17~22, 1966.
- 18) 岸本 正, 木下善之介, 清村 寛, 黒田洋生, 中田仁成, 仲川雅視, 河原玲二: 最近8ヶ年間に大阪歯科大学付属病院矯正科を訪れた来院患者の統計的観察. 日矯歯会誌, 233: 134~135, 1964.
- 19) 一色泰成: 矯正歯科の保険診療をふりかえって. 歯科学報, 93: 巻頭言, 1993.
- 20) 坂本輝雄, 国母英一, 神崎寛人, 伊藤明子, 喜田賢司, 渡辺和也, 野嶋邦彦, 原崎守弘, 谷田部賢一, 一色泰成, 瀬端正之: 唇顎口蓋裂と顎変形症患者の千葉水道橋両病院における10年間の動態調査. 日口蓋裂会誌, 19: 347~348, 1994.

Trends of the Numbers of Cleft Lip and Palate Patients and
Maxillo-Facial Deformity Patients at Tokyo Dental College
Chiba Hospital and Suidoubashi Hospital over 15 Years from 1983 to 1997

Teruo SAKAMOTO, Morihiro HARAZAKI, Yasushige ISSHIKI

Department of Orthodontics, Tokyo Dental College
(Chairman : Prof. Yasushige Isshiki)

Key words : patient trend, cleft lip and palate, maxillo-facial deformity

We observed the numbers of cleft lip and palate patients and maxillo-facial deformity patients at Tokyo Dental College Chiba Hospital and Suidoubashi Hospital over 15 years from January 1983 to December 1997.

The total amount of the cleft lip and palate patients who were treated at Chiba Hospital during the period was 471, on the average 31.4 a year and the ratio of treated patients was 94.0 %. The total amount of the maxillo-facial deformity patients was 840, on the average 56.0 a year, and the ratio of treated patients was 90.5%. At Suidoubashi Hospital, the total amount of the cleft lip and palate was 568, on the average 37.9 a year, and the ratio of treated patients was 84.6%. Regarding maxillo-facial deformity, 463 patients visited the hospital during the period—averaging 30.9 yearly—and the ratio of treated patients was 84.5%. With respect to cleft lip and palate patients, the total yearly numbers were almost same, however, the number of maxillo-facial patients increased drastically since the health insurance system was introduced (in 1990 at Chiba Hospital and 1996 at Suidoubashi Hospital). In 1997, patients who claimed insurance accounted for 37.5% and 40.2% of all patients at Chiba Hospital and Suidoubashi Hospital respectively.

(*The Shikwa Gakuho*, 99 : 591~602, 1999)